

不等比較表現に関する日西対応試論

三 好 準 之 助

要 旨

比較表現には、2種類の事物について、ある共通の属性が同等であると解釈したときの同等比較と、その属性の程度に違いがあると解釈したときの不等比較が考えられる。本稿では、まず、不等比較の一般的概念を明らかにし、つぎに現代日本語の不等比較表現のさまざまな表現形式を列記する。そしてその諸形式に対応する現代スペインの一般語の表現形式を挙げて、両言語の不等比較表現における諸形式の、ひとつの可能な対応関係を提示する。本稿は日本におけるスペイン語研究の新たな試みであるが、日本のスペイン語教育に資する資料のひとつになれば幸いである。

キーワード：不等比較，優等比較，日西対応，「より」，más。

スペイン語の不等比較の表現には優等比較と劣等比較があるが¹⁾、本稿ではその優等比較に注目して、基本的に、現代日本の標準語の「より」の表現と現代スペインの標準スペイン語の más の表現を対比することで、日西の不等比較表現における可能な対応を提示する。

1. 不等比較の表現とは

比較表現を研究している Stassen (1985) は、程度比較の認知構造を設定し、それがどう言語化されるかという観点から説明を試みている。その類型論的研究を紹介する山本 (2004: 25) は、「何かを比較するという行為自体が、人間にとってきわめて日常的で基本的な認知活動の一つと考えられるとすれば、比較表現を全く持たない言語の存在というのは、想像し難い」と述べている。日本語にもスペイン語にも、不等比較表現は存在する、ということである。

1.1. 日本語とスペイン語が属する不等比較表現の型

Stassen (1985: 24) は、自然言語で比較表現と見なされる構文の条件を「叙述尺度の上でふたつの（ことによると複雑な）対象物に度合い化された（すなわち同一ではない）位置をあてがうという意味的機能を持っていること」としている。そして不等比較の場合には、最低限、3種類の要素が含まれているが、それは比較が行われる属性を表わす度合表示の叙述尺度と2種類の概念である。ひとつは基準となる概念であり、もうひとつは基準に対して計測されて不等であることが判明する概念である、と述べている。

スペイン語を含むヨーロッパ諸語の「典型的な比較表現では、たとえ比較基準が明示されて

いる場合であっても、接辞（英・独 -er）にせよ、副詞（英 more, 仏 plus）にせよ、比較属性に対して義務的な標識を付加している。他方、日本語は、そのような義務的な比較属性標識を持たない」（山本 2004: 24）。Stassen（1985）は世界の諸言語の不等比較表現を 6 種類の型に類型化しているが、それによれば、日本語は、比較基準に、基点からの分離を意味する表現を用いる離格型比較という型に属しており（1985: 114）、スペイン語は、比較基準が何らかの小辞（比較属性標識）を伴って、比較対象と同じ格関係によって表現される小辞型比較という型に属している（1985: 188）。

1.2. 不等比較の認知構造

不等比較の無標の構文は、たとえば英語では“X is A-er than Y”である。日本語なら「X は Y より A だ」、スペイン語なら“X es más A que Y”となる。この場合「二つの個体 x と y が実際に A であるのかどうかに関しては何も言っておらず、単にスケール上の序列（ordering）について述べているだけである」（澤田 2012: 137）。すなわち、X は常識的な標準と比べて A であるのかどうかは不明であるが、比較の基準項である Y と比べれば A である、という意味が表現されている。そして基準項となる Y は A であるかどうかに関しては何も言っていないのであれば、話者にとって Y は、常識的な標準と比べてやはり A であると認知されるか、標準と同等であって特に A ではないと認知されるか、あるいは標準と比べると $-A$ （マイナス A）、すなわち A の対義概念の B であると認知されるか、の 3 種類の認知方法の可能性が有ることになる。

1.2.1. Y が A であるとき

たとえば英語の“X is A-er than Y”で Y も A であると認知されている場合、A という比較属性の尺度は、左が低くて右が高い図で示されるであろう。「尺度には正と負の両極があり、多くの場合は、中立的な値や基準値を持つ」（谷口 2003: 139）。A を含む尺度としては、A（正）という概念とその対義概念である B（負）というふたつの概念が隣接関係になっている尺度（図 1）を考えることになる。ある時はその尺度の正の部分のどこかに X と Y が位置を占める。すなわち、X も Y も A という概念の内部に位置していることになる。

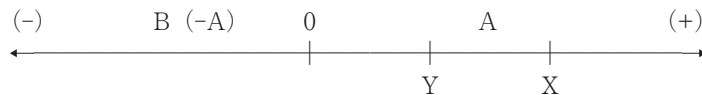


図 1

この場合、基準項 Y の属性の度合が正 (+) であるから、比較項 X の属性の度合はそれよりも大きい度合というように認識される。この不等比較のタイプを Y+（ワイプラス）とする。

1.2.2. YがAでも-A(B)でもないとき

この場合、A(正)とその対義概念であるB(負)が隣接関係になっている尺度において、その尺度の正の部分のどこかにXが位置しており、YはAでもBでもなく、図2のように、その尺度の正と負の分岐点(0)を占めている。すなわち、Yは比較計測の起点を表わしている。これは上記の谷口が指摘している「中立的な値や基準値」のことである。



図2

基準項のYは計測起点(0)であるから、比較項のXは尺度上のAの部分のどこかに位置しており、単なる正(+)であると認識される。0と+は不等である。この不等比較のタイプをY0(ワイゼロ)とする。

1.2.3. YがB(-A)のとき

第3の認知のタイプするとき、図3で示されるように、比較項のXはAという概念の内部に位置しており、基準項のYは尺度の基準点(0)の左側を占めて隣接する対義概念(-A)のBのなかに位置を占めている。そうするとXが占めるAもYが占めるBも、それぞれの度合の大小は問題にならなくなる。不等比較の対象であるXとYは、相補的な2種類の対義概念を比較属性として提示していることになる。このような不等比較のタイプをY- (ワイマイナス)とする²⁾。

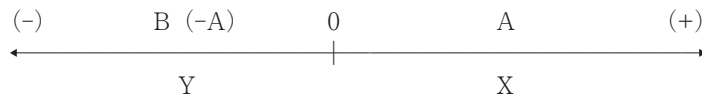


図3

1.3. 不等比較の不等性について

上記(1.2.)で、理論上、不等比較の表現に3種類のタイプが存在する可能性があるとして仮定された。

1.3.1. 度合的な対義性

不等比較の構文は、叙述尺度の上でふたつの対象物に度合化された位置をあてがうという意味を持っている(1.1.)。不等比較は、ある属性の尺度のうえで2種類の度合化された位置をあてがうことであるが、その尺度は対義概念を含む。

Lyons (1977: §9.1.)は構造意味論の解説で、語義の対立(opposition 対義性)を論じている。対義性の基本は「それぞれの語は発話されると、話し手と話し相手の意識のなかにその対義語

を呼び起こす」ことであり (1977: 270), 対義性の背景には二分化 (dichotomization) という現象がある。これは言語においては二次的にしか反映されないものの, 人類に普遍的な傾向である (1977: 271)。Lyons によれば, 語彙の対義性には数種類あるが, そのなかに度合化 (grading) による対義性がある。度合化は比較を意味する。度合化では度合的対義語と非度合的対義語が区別される。比較に関連する度合的対義語では, 一方の叙述は相手の否定を意味する。すなわち, (cold - neutral - hot という尺度では) X is hot は X is not cold を, X is cold は X is not hot を意味する。しかし X is not hot は一般的に X is cold を意味することはない (1977: 272) (hot の度合の違いを意味する, と解釈することができよう)³⁾。

この説明を本稿の不等比較のタイプと比べれば, いずれのタイプも度合的対義語に対応する。理論上, A が hot で B が cold であるとすると, Y+ のタイプは Y is not hot が別の度合の hot である Y is hot を意味する「Y+ 比較」(ワイプラス比較), Y- のタイプは Y is not hot が Y is cold を意味する「Y- 比較」(ワイマイナス比較) である, ということになる。Y (0) のタイプは起点比較であるが, Y is not hot が hot とも cold とも意味しない「Y0 比較」(ワイゼロ比較) となるであろう。

言語表現で作用する二分化という現象は, 価値評価という点では二価値志向性 (two-valued orientation) と結びつく。VoBhagen (1999: 301) はメトニミーを論じる際に, 「価値評価の領域における二価値志向性は, 基礎的な概念的現象, すなわち対立 (opposition 対義) の一種の理想的な種類であると思われる。そして意味的対義と概念的対義の間には不一致がある。意味論的には, ふたつの度合的対義語の間の対立は中立的な中間点を含む尺度全体を対象にするが, 概念的なレベルでは, ふたつの対義語だけを含む」と述べている。本稿の不等比較のタイプでは, 中間点を含む cold (B) - neutral - hot (A) という尺度において, Y- 比較は, 意味的には単一の尺度で行われる比較であっても, 概念的には A と B の対義の比較として意識されることがある, ということになる⁴⁾。

1.3.2. 不等比較と否定

上記 (1.3.1.) で言及されたように, 対義語とは, 我々の認識上, その一方を述べれば他方を否定することを意味する。不等比較とは, 等しくない二者を比べるという表現であるが, 不等比較表現を否定という観点から考えれば, 比較の基準項 (Y) の属性を否定し, 比較項 (X) の属性を肯定するという不等性の認識がその基本になっている。

英文法の比較表現を論じる八木 (1987: 128) は, He solves problems faster than any of my friends ever could. 「彼は私の友だちのだれよりも早く問題を解決する」という例文 (意味的には最上級表現) を提示して, 比較節 (= 基準項) には表面上否定辞がないにもかかわらず, 一般に否定対極表現が生じ得ることを指摘し, 「このことは, 比較節に何らかの意味で否定が内在していることを示唆する」と述べている。

この否定の内在については、すでに生成文法家の Ross (1969: 294) がその存在を主張している。彼は、不等比較表現の John is taller than that man (is) 「ジョンはあの男性より背が高い」の基底構造 John is tall to an extent to which that man is not (tall) 「ジョンはあの男性がそうでない程度に背が高い」では、基準項に否定が含まれていると述べている。この内在するはずの否定を不等比較のタイプと話者の認識に存在するはずの度合的対義語 (1.3.1.) の関係から説明すれば、that man is not tall は、度合的対義語が意識されるのなら一般に that man is short を意味しないので Y+ 比較に対応し、非度合的対義語が意識されるのなら that man is short を意味するので Y-比較に対応する。基準項における否定の内在は Y+ 比較と Y-比較のタイプの不等比較表現に認められる可能性がある。

では、このような否定の内在は、すべての不等比較に適応されるのであろうか。まず、不等比較が起点を基準にする Y0 比較なら、基準項 (Y) が tall と short の中間点を指しているのが that man が tall であるとも short であるとも意識されない。だからこの場合、基準項における否定の内在は考えられない。さらに、Bosque (1980: 77) が指摘しているように、数量化された不等比較の構文では Ross が想定した基底構造が認められない。その数量化の表現は、基準項 (Y) と比較項 (X) との差異を表現するが、その差異は比較項の属性の程度を修飾しているのではなく、両項の属性の度合の違いに相当する⁵⁾。Bosque はそのことを次のような具体例で提示している。Juan es un poco / bastante / mucho más alto que Manuel. 「ホアンはマノエルよりも少し／十分に／ずっと背が高い」の基底構造には *Juan es un poco / bastante / muy alto en un grado en el que Manuel no lo es. 「ホアンはマノエルがそうでない度合において少し／十分に／ずっと背が高い」が考えられない、と説明している。

1.3.3. 不等比較の程度表現

比較項 (X) と基準項 (Y) をひとつの属性について比べる不等比較の表現では、その不等性の程度を表現することができる。上記 (1.3.2.) で Bosque が言及している数量化も程度表現の一部である。

不等比較の表現は基本的に X と Y が不等であることだけを表現する。Y+ 比較なら X は属性の度合がその尺度上で Y よりも上位を占めていることになる。Y0 比較や Y-比較なら X は尺度上の正 (+) の部分を占めることを表現する。そしてその不等性の程度の表現には、X と Y の共通属性の程度がその尺度上でどのような差があるのかを表現するものや、Y+ の度合いが大きいと認識されているときに X の度合がさらにそれよりも大きいことを表現するものがあるが、また、Bosque が提示している数量化表現のように、具体的な差がどれほどであるかを表現することもある。

2. 比較属性の表現に関して

不等比較の表現では、最低限、3種類の要素が含まれる(1.1.)。比較が行われる属性(A)を表わす度合表示と2種類の概念、すなわち基準となる概念(基準項, Y)と基準に対して計測されて不等であることが判明する概念(比較項, X)である。

比較属性(A)を表わす度合表示では、小辞型比較をするスペイン語なら義務的な比較属性標識(比較語の más など)があるが、離格型比較の日本語なら基点からの分離を意味する表現(「より」)を使用する。しかし現代日本語では、この「より」が比較属性標識の役割を果たしている(cf. 下記の2.1.の、『明鏡』の用法⑤)。

2.1. 日本語の比較属性標識について

日本語の不等比較表現にはスペイン語の más のような本来的に義務的な比較属性標識がないが(1.1.)、現代語の不等比較構文は、比較項(X)について述べる文において比較の基準項(Y)を「より」で表わす「XはYよりAだ」となり、「より」が比較属性標識の役割を果たしている。

「より」は、国語辞典の『明鏡』(北原2002)によれば、そもそも格助詞(語義7種)であるが、副詞の用法もある。本稿に関連する用法は以下の5例である。格助詞の4種類(①~④)の用法と副詞の用法⑤である。

- ① 状態の表現を伴って、比較の基準を表わす。「昨日より今日のほうが寒い」。
- ② 選択するものを並べて、他と比べて退けられる物事を示す。「私より彼女を選んだ」。
- ③ 多く「前」「先」「後」「上」「下」など、相対的な関係を表わす語を伴って、基準(計測起点)となる時間・空間・数量を表わす。「まん中より後ろに置く」。
- ④ 下に打ち消しの語を伴い、「…より(ほかに)」の形で、方法や能力などを表わす語を受けて、それしかないと限定する意を表わす。「あきらめるよりしかたない」。
- ⑤ それ以上に、もっと。「より高く跳ぶ」。格助詞から派生した用法。もともとは欧文の比較級を訳すために案出されたもの⁶⁾。

不等比較表現「XはYよりAだ」での「より」は、基準項(Y, 比較基準)の導入辞であるが、単なる導入辞ではなく、同時に、不等比較表現の存在を暗示している。比較項(X)が比較属性(A)の尺度上で正(プラス, positivo)であるという意味も持っていることになる。このような機能を「正の比較表示」と呼ぶことにする⁷⁾。

2.2. スペイン語の比較属性標識について

スペイン語の不等比較の表現では、基本的な比較属性標識は優等比較の *más* 「もっと多くの (・に)」と劣等比較の *menos* 「もっと少ない (・なく)」という比較級語である。現代スペイン語におけるこのふたつの比較級語の使用頻度は、三好 (1990: §1.2.) によれば、優等比較の標識 (*más*) と劣等比較の標識 (*menos*) の割合が91%対9%になっている。優等比較の表現が圧倒的に多く使われていることがわかる (→ 3.2.2.)。

スペイン語の比較構文はスペイン文法のなかで最も複雑な統語構造を持つもののひとつであるが⁸⁾、*más* を使った不等比較構文の基本形は“X es *más* A que Y”である。これは、たとえば NGLE (2009: §45.2d) に出されている例文1のように、つぎの要素で構成される (用語には筆者のものも加える)⁹⁾。

1. El árbol es mucho *más* alto que la casa. 「その木はその家よりずっと高い」

①比較項 ('el árbol'); ②基準項 ('la casa'); ③比較属性標識 ('*más*'); ④数量詞句 ('mucho *más* alto'); ⑤比較属性語 ('alto'); ⑥比較補語 ('que la casa'); ⑦比較属性 (高さの程度); ⑧差異項 (TD, 'mucho') である。比較項が X, 基準項が Y, 比較属性が A となる。

2.1. で示したように、スペイン語の“X es *más* A que Y”に対応する日本語の「XはYよりAだ」では、「より」が基準項 (Y, 比較基準) の導入辞であり、同時に、不等比較表現の存在を暗示して、比較項 (X) が比較属性 (A) の尺度上で正であるという意味の「正の比較表示」という機能を持っていると仮定される。スペイン語では、*que* が基準項導入辞として働き、不等比較のなかの優等比較の比較属性標識 *más* が「正の比較表示」という機能を果たしている。

スペイン語の *que* は一般的に、接続詞と関係詞に大別してその用法が説明されるが、比較の基準項導入辞としての *que* は、接続詞としての用法のひとつとして扱われる¹⁰⁾。Alcina & Blecia (1979: §8.1.) は *que* の機能を予告・関係・評価の3種類に分け、評価の *que* の働きのひとつとして不等比較の基準項の導入を挙げている。

スペイン語の比較基準項導入辞としてはもうひとつ、起点表示の機能を持つ前置詞 *de* がある。これは“X es *más* A de Y”の構文で、数量にかかわる評価を表現する (Fernández 1986: §81)。いわゆる「相対的關係の不等比較表現」を行なうときの基準項導入辞である (→ 5.2.)。

2.3. 不等比較表現の真性と疑似

不等比較表現は比較項 (X) と基準項 (Y), それに比較属性 (A) で構成され、それに比較属性標識が加わる。

日本語の場合、基本的な不等比較表現は「XはYよりAだ」である。この表現形式を「真性不等比較」と呼ぶことにする。この表現形式には「XはよりAだ」のようにYが省略され

ることがある。さらに、「より」には属性が明示されないタイプの特異な比較の構文がある。「YよりXだ」(Aが不在)という属性非明示型比較の構文である。森山(2004: §2-2)は「属性非明示型『より』構文」として解説しているが、「比較の文ではないという見方もある」とも指摘している。安達(2001: §3)は「比較述語を持たない比較構文」として詳述しているが、「このような文では何について比較を行うのかという比較のテーマが明示されないところから典型的な比較構文とは異なった意味を持つと考えられる」とも述べている。そこで本稿では、このような不等比較を「疑似不等比較」と呼ぶことにする。

スペイン語の場合、その基本的な不等比較表現では、比較される概念(比較属性)は尺度上の度合として表示される(NGLE 2009: §45.1b)。この表現が「真性不等比較」となる。そして、比較項が基準項の潜在的な代役となる *El problema es más político que legal*。「その問題は法的であるよりは政治的である」とような表現もあるが、そこでは属性の比較ではなくて適切性の比較が表現される(NGLE 2009: §45.12f)。このような不等比較表現を、Gutiérrez(1994b)などに従って「疑似不等比較」と呼ぶことにする。

3. 真性不等比較の表現

真性の不等比較表現とは、比較項(X)と基準項(Y)、それに比較属性(A)で構成され、それに比較属性標識が加わる。

日本語の真性不等比較表現は基本的に、「XはYよりAだ」である。森山(2004: §2-1)はこの用法をXとYの「二者間有差比較」と呼んでいる。本稿ではこの用法を、完全比較・不完全比較・一方指定比較の3種類に分けて考察することにする。

スペイン語の真性不等比較の構文とは、基本的に、“X es más A que Y”である。

3.1. 完全比較

XもYもAも表現されている真性不等比較を「完全比較」と呼ぶことにする。

3.1.1. 日本語の場合

日本語の場合、たとえば森山(2004: §2-1)は次のような2種類の用例を挙げている。

- 2a. 松茸は椎茸より(もっと)高い。
- 2b. 松茸の方が椎茸より高い。

これらの用例では、起点表示という基本的な機能のある助詞「より」によって、「椎茸(の値段の高さ)」を「地」(ground)として指定し、そこから離れたものとしての「松茸(の値段の

高さ)」を「図」(figure)として取り上げる(森山2004:33)。ふたつの要素の対比という意味を明示するために、2b.のように、文の主体である比較項(X)は「ほう」という方向を意味する名詞によって示されることが多い(記述文法22011:152)¹¹⁾(cf.『明鏡』の用例④)。

完全比較の場合、比較項(X)や基準項(Y)がそれ自体で「一般的にその性質をもっていることは必ずしも含意されていない。(…)たとえば次の例で、『弟』や『父』が『背が高い』ことは含意されていない。『弟はまだ中学生だが、すでに父より背が高い』。(…)ただし、『もっと』のような程度副詞が共起した場合には、比較構文の含意が変わってくる」(記述文法22011:153)。この指摘を本稿の不等比較のタイプと関連づければ、完全比較はY+比較・Y0比較・Y-比較のどれかになる可能性がある。父の背丈が普通であると思われていれば父の背丈が基準となってY0比較だと解釈されるし、「もっと」などと共起すればY+が含意され、Y+比較のタイプに対応する、ということである¹²⁾。

3.1.2. スペイン語の場合

完全比較の構文の好例は上記の例文1である。

1. El árbol es mucho más alto que la casa.

másが「正の比較表示」を行ない、queが基準項を導入している。

スペイン語でも日本語と同じく(2.1.1.), Gutiérrez(1994a:13)が説明しているように、1.2.で提示した対義概念を含む属性の尺度が考えられるが、完全比較では、例文1のel árbol(X)とla casa(Y)は常識的に認識されている高さを表現しているわけではないので、その構文はY+比較・Y0比較・Y-比較のどれかになる可能性がある。

なお、日本語の例文(2aと2b)では、スペイン語の1のように、X(比較項)が主語であるが、スペイン語の基本的な不等比較表現では、例文3のように、Xが主語以外であることもある¹³⁾。X「生者」とY「死者」が主語「世話をすること」の対象になっている。

3. Es más importante cuidar de los vivos que de los muertos. 「死者より生者の世話が重要である」¹⁴⁾

3.2. 不完全比較

真性不等比較には同一文中に基準項が提示されていない用法がある。本稿ではこの構文を「不完全比較」と呼ぶことにする。不完全比較とは、意味的には典型的な比較の条件を満たしているが、表面上、基準項を持っていない構文のことである(cf.『明鏡』の⑤の例文)。基準項の不在の理由は、そのような対比要素は文脈から補えるからであるが、また、広告文に多く見ら

れるように、聴者（または読者）にその補足をゆだねることによって、心理的効果をいっそう高めるという意図があるからである（安井ほか 1976: §26.3.1.）。

3.2.1. 日本語の場合

日本語の不完全比較の構文は、基本的に、「Xは、より A だ」である。森山（2004: 33）は次のような不完全比較の用例を挙げている。

4. (椎茸は高いが,) 松茸は {もう少し・より・さらに・もっと・遥かに} 高い。

森山にとって、不完全比較の構文は、「『より～、もっと～』などの比較の程度副詞だけの比較文である。(…)比較の程度副詞だけでは、属性が上回ることを表すため、通常、先行する命題が必要で、いったん比較対象となる(属性表示の)命題が示された後、後続文で比較された属性が主張される」(森山 2004: 33)。他方、この「『より』は、『ずっと』や『もっと』のような副詞と違い、比較の程度を強調する働きをしているものではない。それ自身が比較構文の形成に与っているものだと考えられる」(安達 2001: 1)、という指摘がある。「より」が「正の比較表示」をしているという指摘である。

格助詞「より」は、2.1. で説明したように、基準項導入辞であるだけでなく、「正の比較表示」という機能も持っている。このことを安達（2001: 15）は、「副詞『より』はそれ自体で比較構文を構成するわけではな」く、「構文環境、主文述語の語彙的な意味などの助けを借りて比較の意味を付け加える働きを持っている」と説明している。

不完全比較の場合でも、Y+ 比較・Y0 比較・Y- 比較の表現が可能である。上記の森山の例文 4 では、先行命題で基準項が Y+ [椎茸は高い] であることが示されているので、文脈全体では Y+ 比較である。他方、たとえば例文 5（筆者の作例）では、比較項の属性が「静かな」で基準項の属性が「騒がしい」であるから、意味論的には同一尺度のなかでの比較であるが、概念的には基準項が比較項の対義概念を表現していて Y- 比較になって、「より」は「正の比較表示」としてのみ機能している。

5. その店は安いが騒がしかった。私はより静かなところを探した。

また、つぎの例文 6 では、労働者と資本家の集団に関する有利さが比較されているが、問題の政策が労働者と比べて資本家に有利である、という意味が「より」によって表現されている。労働者には有利でないという認識が背景があれば、この不完全比較は Y- 比較になるし、労働者への有利さ（基準項）の度合を起点にして資本家への有利さが認識されていれば、この不等比較表現は Y0 比較であることになる¹⁵⁾。

6. (資本家階級と労働者階級の所得格差は再び拡大したが) そうなった主な要因は, (…)
資本家により有利となるような政策が採用されたからであった。(中野 2014: 148)

不完全比較の場合, 副詞の「より」は基本的に起点表示の機能がある格助詞の「より」とは異なって, 基準項導入辞としては働いておらず, 「正の比較表示」という機能だけを持っている。不完全比較は心理的効果の高い Y-比較として理解される可能性が高くなる, ということはあるであろう。ここには意味的には Y+ であっても概念的には Y-として意識されることがある「度合的な対義性」(1.3.1.) も関与していよう。

他方, 程度副詞の「もっと」は, 不等比較のなかの Y+ 比較を表現し, 基本的にはその程度差の存在を表現する程度副詞である。基本的に, 完全比較の「X は Y よりもっと A だ」では Y+ 比較を表現する (7.1.)。しかし不完全比較では以下のような Y-比較の使い方になることがある。Y-比較では, 意味論的には同一尺度のなかでの比較であるが, 概念的には基準項が比較項の対義概念を表現している (3.2.2.)。例えば例文の 7 と 9 であるが,

7. 警官はふたりいた。ひとは若く, もうひとはもっと年配だった。(柚月 2019: 234)
8. 警官が二人入ってきた。[…] 一人は若く, 一人は中年であった。(林 2020: 70)
9. いいながらどすどすと縁側にやってきたのは, 健だ。「もっと静かに歩きなさいよ…(辻 1987)

7では、「ひとり」(Y) は「若い」(B) が「もうひとり」(X) は「年配」(A), という Y-比較であり, 9では, [やってきたとき] (Y) は [騒々しい] (B) が [命令の内容] (X) は「静か」(A), という Y-比較である。Y-比較では, 意味論的には同一尺度のなかでの比較であるが, 概念的には基準項が比較項の対義概念を表現している。不完全比較が Y-比較になりやすいのは, 比較される二者の属性の差が, Y+ 比較よりも Y-比較のほうが明確に表示できるからであろう。他方, 7とよく似た意味を表現するが「もっと」を含まない 8 のような使い方もある。「もっと」がなければ二人の年齢は比較されておらず, それぞれが常識的に判断される年齢であることが表現されている, と解釈することができる。

3.2.2. スペイン語の場合

スペイン語の不完全比較の構文は, 基本的に“X es más A”である。この場合, Y (基準項) が不在であるから, 「正の比較表示」の機能を果たす más だけが使われる。

この構文ではスペイン語でも, 日本語と同様, Y+ 比較・Y0 比較・Y-比較が可能である。例文 10 の比較文では, Y「牛」が不在で, X「象」のことが「正の比較表示」によって A「好き」だと述べられている。この返答では, 返答者が牛は好きか (Y+ 比較)・嫌いか (Y-比較)・

どちらでもないか (Y0 比較) が不明であり、どれにもなる可能性がある。

10. — [...] ¿A usted le gustan las vacas? — Me gustan más los elefantes.¹⁶⁾「あなたは牛が好きですか」「わたしは象がもっと好きです」

日本語の例文 5 は不完全比較で Y-比較の例である。そしてスペイン語の場合、不完全比較で Y-比較の例としては、たとえば 11 (BBC 1986: 106)¹⁷⁾ がある。

11. La primera vaquilla sale del corral. La gente está muy animada. [...] A las ocho de la tarde la última vaquilla vuelve al corral, y cuando llega la noche todo está más tranquilo.「最初の闘牛は囲い場から出る。人々はとても活気づいている。[...] 夕方 8 時には最後の闘牛が囲い場に戻り、夜になるとすべてがもっと静かになる」

ここでは、X (比較項)「夜の雰囲気」が Y (基準項)「昼の雰囲気」と比較されているが、比較属性の尺度「雰囲気の静けさ」では、X が「静かな」だが Y は「騒々しい」である。

不完全比較は Y-比較になりやすいようである。例文 11 と同じように más tranquilo という表現を含む例文の 12 や 13 もそうである。

12. A intervalos, al doblar un recodo aparecía el Cantábrico, encrespado. [...] El Mediterráneo solía ser más tranquilo. (Gironella 1989: 590)「ときどき、湾曲部を曲がると波立ったビスケー湾が姿を見せた。[...] 地中海は常にもっと静かであった」
13. Estaba atemorizado, asustado, pero al vernos quedó ya más tranquilo. (Zunzunegui 1960: 12)「彼はおびえておどおどしていたが、私たちを見るともっと穏やかになった」

Y-比較では、意味論的には同一尺度のなかでの比較であるが、概念的には基準項が比較項の対義概念を表現している。では、なぜ、más だけを使う不完全比較は、Y-比較になりやすいのであろうか。正負という極性のある 2 項対立の尺度では正のほうが無標的に使われやすい (cf. Lyons 1977: 275) から、問題の尺度上で Y が負のほうのひとつの度合を占める場合、X が負の度合のなかの正に近いほうの度合を占めると言うよりは、正のほうの度合を占める (Y-比較) と言うほうが無標的になろう。また、スペイン語の不等比較表現では、X を尺度上の負のなかで正に近いほうの度合を占めることを劣等比較 (menos を使用) で表現するよりも、正の度合を占めることを優等比較 (más を使用) で表現する Y-比較を選ぶ傾向が強いことも、この現象に関与していると思われる (2.2. で紹介した比較級語の使用頻度を参照されたい)。

不完全比較の場合、日本語の「もっと」（あるいは「より」）とスペイン語の *más* は、Y-比較になりやすいという共通特性があると言えよう。

3.3. 一方指定比較

比較される二者 (X, Y) のなかで、その一方が比較属性 (A) を有している、という表現が、一方指定比較である。一方指定比較は、比較される二者は基本的に不特定である。基準項が明示されていないという点では不完全比較と同じであるが、指定される一方は比較項として明示されないという点で不完全比較と異なる。一方指定比較の基本的な構文は「(不特定の二者のうち) A のほうが～だ」である。

一方を指定するのであるから、肯定される属性はその一方にしか認められない¹⁸⁾。それゆえ一方指定比較では、指定された方を X とすれば、X だけが比較される属性 A を持っていることになり、もう一方の Y は A の代わりにその対義概念の属性 B (-A) を持っていることになる。それゆえ、一方指定比較は、不等比較のタイプとしては Y-比較になる。

3.3.1. 日本語の場合

森山 (2004: 33) は、一方指定比較の構文を「(X と Y では) X の方が A だ」であるとする。そして例文 14 を挙げ、この構文は「方向による枠づけにより、片方の要素だけをとり上げることで、比較を表すことになっている」。この場合、「より」ではなくて「ほう」が使われる。「ほう、方」という名詞は方向や方角を表わすのだ、と説明している。

14. 松茸と椎茸では、松茸の方が高い。

「ほう」の語義のひとつは「いくつかある区分けのうちの一つ。特に、対立するもののうちの一つ」を指す(北原の「ほう」の3番目の語義)。この語義の「ほう」を使って行なう一方指定比較では、例文 11 のように「述語に相当するのが当該(の片方)の要素であるということ指定するため、主語は『が』で示される」という森山の説明は受け入れられる。しかしながら、例文 14 は一方指定比較のものとは言い難い。なぜならば、「松茸の方が高い」は「松茸の方が椎茸より高い」から「椎茸より」(Y より)を省略した、不完全比較の用例だからである。

一方指定比較は、比較される二者は不特定であり、「(不特定の二者のうち) A のほうが～だ」というように、その二者はどちらも不等比較の文中に基準項・比較項として現れない。その表現としては、「(ふたりのうち) 背の高い方が先生だ」とか「(ふたつのうち) 小さいほうが高価だ」などが考えられるが、実例としては、たとえば 15 が挙げられよう。

15. まもなく前方に二つの頂が見えてくる。右の高いほうが通称嵐山、左が近文山であ

る。(北海道歴史教育研究会)

不特定な(比較される)二者は「二つの頂」(存在としては X と Y)であり、「右の高いほうが通称嵐山」が「A のほうが～だ」に相当する。

3.3.2. スペイン語の場合

日本語の一方指定比較の表現に対応するスペイン語表現を考えてみよう。「(不特定の二者のうち) A のほうが～だ」のように名詞に「ほう」が後接する表現には、定冠詞付きの比較級語を使う方法がある(Paco es el más alto (de los dos). 「(二人のうちでは) 背の高いほうがパコだ」)¹⁹⁾。スペイン語の一方指定比較には次のような用例がある。

16. Dos policías -el más alto, armado con metralleta- surgieron ante sus ojos, (Azancot 1988: 18) 「二人の警官が(背の高いほうが自動小銃で武装していたが)彼の目の前に現れた」
17. Ambos personajes iban correctamente trajeando de calle. —Buenas noches— dijo el más alto —y perdone por la hora. (Martín Vigil 1968: 280) 「二人の人物は正しく外出着であった。『こんばんは』背の高いほうが言った。『遅れてごめんなさい』」
18. (una pareja de tíos realmente buenos) [...] Después, uno, el más viejo, no mucho mayor que yo en cualquier caso, me interrogó cortésmente (Grandes 1995: 196) 「(実に善良な二人の男) [...] そのあと、年寄りのほうのひとりが、といってもいずれにせよ私よりずっと年配だというわけではないが、丁寧にたずねてきた」

18の比較級語の mayor は、基本的には más grande 「もっと大きな」の意味で使われる。

4. 疑似不等比較の表現

疑似不等比較表現とは、比較される二者(X, Y)について、比較属性(A)を含まない表現のことである。

4.1. 日本語の場合

日本語の疑似不等比較表現は「YよりXだ」である。以下のような用例が考えられる。

19. 人に聞くより自分で調べるべきだ。

20. 午後より鶏口を選んだ。
21. 私より彼女を選んだ。

例文の19と20は森山(2004: 34と35)の挙げている用例である。19について森山は、「一見その共通属性が見えにくい」が、『人に聞く』という述語と『自分で調べる』という述語が、動きの価値における適切性(いわば『望ましさ』)において比較されていると言える。特に、『すべきだ』のような事態選択を表す形式や、希望の形式、命令文、意志形の文などの、動きを策する形式の場合、事態のあり方は唯一的に決定されているわけではなく、あるべき事態としての適切性によって比較されている」と述べている。そして「選択の形式が適切性というプラス価値だけを表すのは」、例文20や『明鏡』の用法②の例文である21のような「選ぶ」という語の用法からも明らかのように、「選択は無標では『よりよいものを選ぶ』という価値に連動することになる」と説明している。また、記述文法2(2011: 154-5)によれば、「選択用法の比較構文は、前件を打ち消して後件を前面に出す『XではなくY』のような文型と近い意味を表す」(このXは本稿のYに相当し、このYは本稿のXに相当する)。疑似不等比較表現は、Y-比較になりがちである、ということになる。

日本語の疑似不等比較を不等比較のタイプで説明すれば、適切性を帯びるX(比較項)に対して、Y(基準項)にも度合が低い適切性があると認識されていればY+比較になるし、Yには適切性がないと認識されていればY-比較になる。

例文19「人に聞くより自分で調べるべきだ」がY+比較であると認識される場合、「人に聞く」(Y)ことも適切だが、「自分で調べる」(X)のがもっと適切だ、という意味になるが、そうすると「Yに加えてXだ」というY+比較の「追加表現」の意味になる。また、例文19がY-比較であると認識される場合、「人に聞く」(Y)ことは不適切で、「自分で調べる」(X)のが適切だ、という意味になるが、この不等比較は「訂正表現」と呼ぶことができよう。そして例文19が「人に聞くよりむしろ自分で調べるべきだ」の意味で使われる場合、その疑似不等比較は「優先表現」と呼ばれる可能性がある。「むしろ」は「それよりこれを選ぶ、そう言うよりこう言った方がいい」という優先の意味を表わす(西尾ほか2007)。

森山(2004: 35)は、疑似不等比較が「訂正表現」であれば、選択における適切性が判断レベルの問題になるとして、そのような表現の例として例文22を挙げている(cf.『明鏡』の用法②)。森山の例文23も適切性が判断レベルに関与しているが、23は「ひどさの度合いが少ないこと」として選ぶという、「むしろ」が入りうる「優先表現」の用例となろう。

22. この寝具はふとんというより毛布だ。
23. 途中退場するなら入場しない方がましだ。

優先表現には、つぎのような電車内の中吊りの文句の 24 とか例文 25 もある。

24. (ひとり) 作るより食べるのが好き。(もうひとり) 食べるより作るのが好き。
 25. 私は一人、洗い物をしていた。(…) 初めて顔を合わせる親類たちと話をするよりは、
 その方が気が楽であった。(矢樹 2020: 177)

例文 24 は「Y より X だ」という構文であるが、「作る」と「食べる」が比較され、一方 (Y) より他方 (X) が好きだ、ということで、Y は好きでない (嫌い) という意味に解釈できるなら Y-比較となるし、Y も好きだというときには Y+ 比較になる。例文 25 も「Y より X だ」という構文である。X (その方) が気楽であり、Y (初対面の人たちとの話) は気楽でない [気重] という Y-比較の例になろう。

4.2. スペイン語の場合

スペイン語の場合、疑似不等比較の基本構文は“más X que Y” (A が不在) である。Gutiérrez (1994b) や Sáez (1999: §17) がそれを疑似不等比較表現として扱っている。NGLE (2009: §45.12f) は、それは比較項が基準項の潜在的な代役となる表現であって、そこでは属性の比較ではなくて適切性の比較が表現されると説明している (2.3.)。

日本語では疑似不等比較の基本的な構文は、[Y より X が適切だ] の意味の「Y より X だ」である。4.1. で明らかなように、意味解釈の可能性として、この構文が「追加表現」「訂正表現」「優先表現」を行なうことが判明した。

スペイン語でも疑似不等比較が日本語と同様、追加・訂正・優先という 3 種類の表現を行なっていることが、以下のように認められている。それぞれの表現について、日本語の疑似不等比較の表現を考慮しながら解説していこう。なお、この 3 種類の表現の呼び名は確定的なものではない。研究者の主観の違いから、異なることがある。

4.2.1. スペイン語の追加表現

日本語の場合、疑似不等比較の追加表現の意味は [Y に加えて X だ] である。

Sáez (1999: §17.2) は例文 26 を挙げて、スペイン語の真性不等比較の解釈と疑似不等比較の追加表現の解釈との違いを説明しているし、Gutiérrez (1994b: 34) は疑似不等比較の追加表現の例文として 27 を挙げてている。両者の構文は“más X que Y” である。

26. Juan vio más personas que Luis.
 27. Bebe más líquidos que agua.

26は、「ホアンはルイス（が見た）よりも多くの人を見た」の意味なら真性不等比較²⁰、「ホアンはルイス（を見たが、ルイス）よりほかに何人かを見た」の意味なら疑似不等比較の追加表現になる、とする。27に対応する日本語は「彼は水のほかにも液体を飲む」となろう。

追加表現は、不等比較のタイプとしてはY+比較である。

4.2.2. スペイン語の訂正表現

疑似不等比較の訂正表現の構文は、日本語では「(Yではなく) Yというより Xだ」だが、スペイン語ではこの場合も“más X que Y”である。Sáez (1999: §17.2.3.)は例文28を、Gutiérrez (1994b: 68)は例文29などを挙げている（名称は「制限表現」）。

28. Juan compró allí más discos que libros.

29. Es más el director que el gerente.

28の日本語訳は「ホアンはあそこで（本は買わず）本というよりレコードを買った」に、29の日本語訳は「彼は（支配人でなく）支配人というより部長である」になろう。

スペイン語の疑似不等比較の訂正表現には“X, más que Y”という構文も使われる。Gutiérrez (1994b: 47)はその構文の例として30を挙げている。

30. Es un dios, más que un hombre. 「彼は（人ではなく）人というより神だ」

4.2.3. スペイン語の優先表現

疑似不等比較の優先表現の構文は、日本語では「Yより（むしろ）Xだ」であり、スペイン語では基本的に“más bien X que Y”である。優先の表現であるから、基準項の度合は限定されておらず、不等比較のタイプとしてはY+比較にもY0比較にもY-比較にも解釈される可能性がある。Sáez (1999: §17.2.4.)は例文31などを、Gutiérrez (1994b: 68)はこの構文を訂正構文として、筆者にとっては優先表現となる例文32などを挙げている。

31. Yo más bien quiero conversar con Luis que con Teo.

32. Es más bien inteligente que astuto.

31に対応する日本語は「私はテオとよりむしろルイスと話したい」になるし、32なら「彼は賢いというよりむしろ聡明だ」になるであろう。

5. 相対的関係の不等比較表現

本稿では、比較される二者 (X, Y) のうち、基準項 (Y) を比較の尺度の起点として表示する不等比較表現は相対的関係を表示する、と説明する。

5.1. 日本語の場合

日本語の不等比較構文は相対的関係を表わすことがある。本稿第2節で紹介した『明鏡』の用法③である。そこには「まん中より後ろに置く」という例文が挙げられている。相対的関係の用法では、「比較構文が、ある性質に関する比較ではなく、ある基準に対する位置的、時間的な関係を表し、「『前』『後』『左』『右』『東』『西』『南』『北』『先』『上』『下』のような相対名詞が用いられる」(記述文法2 2011: 155)。記述文法2の例文は

- 33. 神戸は大阪より西に位置する。
- 34. 佐藤さんは私が到着するより前に帰ってしまった。

である。33では「大阪(という位置)」が、34では「私が到着する(時間)」が不等性の計測起点となっている。しかし相対的関係の不等比較表現には、位置や時間のほかにも、度合そのものが計測起点になっている表現が含まれる。筆者の作例である例文35では「金額という度合」が、36では「思っている程度という度合」が計測起点になっている。

- 35. それは彼が推測する金額よりも高かった。
- 36. それは彼が思っているより重大であった。

真性不等比較の表現では、比較される二者の持っている属性の尺度上での程度が問題になるが、相対的関係の不等比較表現では、Y(基準項)の度合そのものが起点となって比較されている。それゆえ、相対的関係の不等比較表現はY0比較になる。

5.2. スペイン語の場合

日本語ではこの表現をするのに、「XはYよりAだ」という真性不等比較表現の完全比較の構文が使われる。スペイン語では、比較基準項導入辞としては基本的にqueが使われるが、2.2.で紹介されているように、相対的関係の不等比較の場合、比較基準項導入辞として、起点表示機能の前置詞deが使われる。そこで相対関係の不等比較表現の構文は、基本的に、“X es más A de Y”となる。この表現の日本語とスペイン語の対応を見てみよう。

まず、起点(基準項)が空間の位置(例文33)、空間に準じる位置の概念(35)、文で表現さ

れる概念 (36) の場合である²¹⁾。それぞれに対応するスペイン語は次のようになる。

33. 神戸は大阪より西に位置する。
 35. それは彼が推測する金額よりも高かった。
 36. それは彼が思っているより重大であった。
- 33'. Kobe está situada más al oeste de Osaka.
 35'. Ese costaba más alto de la cantidad que deducía.
 36'. Eso era más serio de lo que pensaba.

また、スペイン語では起点 (Y) が具体的な数値である場合、その構文は “X es más de Y (de A)” になる。このときの más は副詞ではなく、名詞である (Fernández 1986: 80)。それゆえ、「ペドロは背が 190 センチより高い」は、*Pedro es más alto de 190 centímetros. ではなくて Pedro es más de 190 centímetros de alto²²⁾。に、「ペドロは 2 リットルより多いワインを飲んだ (2 リットル以上のワインを飲んだ)」は、*Pedro bebió más vino de dos litros. ではなくて Pedro bebió más de dos litros de vino. になる (cf. Miyoshi 1998 [1990])。

他方、36' のように基準項が関係節で形成される文的概念であるとき、Miyoshi (1990) で報告されているように、基準項導入辞として de も que も使われる可能性がある (ある種の揺れが観察される)。先行詞が lo であれば具体的な数値に準じる概念が表現され、相対的關係の不等比較表現となって基準項導入辞が de になりやすい。しかし先行詞が el・la・los・las のときには先行詞の指す人や事物の概念が表現されることがあるので、真性不等比較表現のときと同じように、基準項導入辞は que になるという傾向が強い。たとえば Miyoshi (1990) の例文 *Mi modo de trabajar es más severo (QUE / DE) el que las autoridades nos requieren.* 「私の働き方は当局が要求しているものよりも厳格である」では、先行詞が事物の概念 (modo) と解釈されてその属性 (度合) が比べられていれば真性不等比較で que に (大多数のネイティブ)、先行詞がその属性の度合を表現していると解釈されれば相対的關係の不等比較になって de が選ばれる (少数のネイティブ)、ということである。スペイン文法研究者のなかには、このような文的概念が基準項のときには que las que のように que が並ぶことの聴覚効果の悪さ (cacofonía) を避けるために基準項導入辞として de を選ぶのだと主張する意見もあるが (そして上記の Miyoshi の例文でもその可能性があるが)、一般的には上述のように使い分けられている (cf. Bolinger 1953, Miyoshi 1990, etc.)²³⁾。

なお、相対的關係の不等比較表現のとき、空間や時間の起点が「いま・ここ」の場合、日本語でもスペイン語でも起点の表示は省略される。その際、日本語では「より」「もっと」などが使われないことが多いが、スペイン語では después と同義の más tarde 「あとで」のように、

常に más を伴う。más adelante には「先のほうで」「あとで、あとに」が対応するし²⁴⁾、Los detalles se explicarán más abajo. は「詳細はあとで説明されます」となる²⁵⁾。

6. 不等比較表現の否定

不等比較表現の否定としては、2種類が考えられる。比較項 (X) を含む節の否定と基準項 (Y) の否定である。

6.1. 日本語の場合

「X は Y より A だ」という真性不等比較では、基本的に「X は A だ」の節の否定表現（「X は Y より A でない」）は言いにくい。森山（2004: 33）は「『? 椎茸は松茸より高くない』という例文を挙げ、この例文が言いにくいのは、『より』が属性の程度差を示すのに対し、否定表現がその属性を否定する点で、意味的に適合しないことによる。したがって、『椎茸は松茸より高い] わけではない』のようにいったん形式名詞によって主張を成立させた上での否定など、別の仕組が必要である」と述べている。すなわち、不等比較の文の比較項を含む節の否定が難しいのは、「日本語では、そもそも、述語にそのまま接続した否定形式は通常は直前の形式を否定するということ、否定された属性は属性の非存在を表わすということ」（2004: 34）によるのだと説明している。そして二者間差比較などの場合には「否定との共起は基本的には不自然である（ただし「よくない」などごく一部の語彙的例外はある²⁶⁾）。むしろ、否定の場合は『松茸ほど高くない』のような特別値を表わす同等形式の『ほど』で言い換えられる、と説明している。そして『否定 + 属性』は、その属性が零であることを表すことによると見られる」（2004: 38）とも説明している²⁷⁾。

本稿の説明では以下のようになる。「X は Y より A だ」において、Y+ 比較なら X の属性の度合が Y の属性の度合よりも高いのであるが、これが否定されて「X は Y より A でない」と言うのであれば、「(Y は A でないが) X も A でない」になってしまう。Y0 比較なら「X (A) は Y (0) より A だ」となるが、これが否定されて「X は Y より A でない」と言う場合でも、「X は A でない」になってしまう。また、Y-比較の「X (A) は Y (B) より A だ」でも、否定されて「X は Y より A でない」と言えば、「X は A でない」ことになる。不等比較のいずれのモデルの場合でも、不等比較という表現に矛盾が生じてしまう。森山が上記のように「その属性が零であることを表すこと」と言うのは、筆者の言う「X は A でない」ことを指しているものと思われる。

さらに、格助詞「より」は、2.1. で説明したように、基準項導入辞であるとともに「正の比較表示」という機能を持っているが、「正の比較表示」の機能であれば、基本的に、「より」に後続する述語は正の肯定表現でなくてはならない²⁸⁾。

なお、不等比較表現では、1.3.2. で言及された基準項における否定の内在は、Y+ 比較と Y- 比較の不等比較に認められる可能性があるが、日本語ではそのような否定の内在を暗示する用法は見当たらない²⁹⁾。

6.2. スペイン語の場合

スペイン語では、述部を否定する表現“X no es más A que Y”では、否定の no は動詞ではなく、比較級語 más のみを修飾する (Gutiérrez 1994b: §11.1.1.)。それゆえ、「彼は兄ほど賢く(は)ない」は No es más listo que su hermano. に対応する³⁰⁾。また、A のない疑似不等比較の否定の構文“X no es más que Y”は例文 37 のように表現されるが、38 のように“no más que Y”が「～だけ、～のみ」を意味することがある³¹⁾。

37. No llovió más que ayer. 「(今日は) 昨日ほど雨が降らなかった」

38. Juan no compró más que veinte libros. 「ホアンは本を 20 冊だけ買った」

基準項の否定は、日本語では問題にならないが、1.3.2. で紹介したように、スペイン語では大きな関心を引いてきた言語現象である。基準項の否定の内在が、いわゆる否定の意味を表現しない「虚辞の no」(‘NO expletivo’) としてそこに顕在することがあるからである。筆者は「基準項における否定の内在は Y+ 比較と Y- 比較のタイプの不等比較表現に認められる可能性がある」と判断した (1.3.2.)。これまでにさまざまな研究者がこの現象を扱っている³²⁾。

虚辞の no は、現代語では、vale más pasar apuros que no quedar sepultado entre las olas 「波の間に葬られるよりは苦境に耐えるほうがよい」とか más vale que sobre que no que falte 「足りないより余るほうがよい」³³⁾ のように、文的概念が比較されるときには許容される (NGLE 2009: §48.11c)。虚辞の no の使用は、現代語では基準項が文的概念でなければ大幅に減少しているが、古くは基準項が人や事物のときにも頻繁に使用されていた (NGLE 2009: §48.11d)。

虚辞の no の出現理由として、Hanssen (1966: §645) は 2 種類の異なった考えの混同を挙げている。Llorens (1929: §123) は、たとえば虚辞の no を含む éste es más blanco que no aquél 「これはあれより白い」の場合、その 2 種類の異なった考えとして具体的に éste es más blanco que aquél 「これはあれより白い」と éste es blanco, aquél no lo es más 「これは白いが、あれはそれほど白くない」を挙げている³⁴⁾。このような混同の想定は、Y+ 比較で起こるが、意味的には Y+ 比較でも概念的には Y- 比較になりうるから (1.3.1.)、この出現理由も Y- 比較という不等比較表現のタイプで見られる可能性が大きい。

度合化できるふたつの対義概念の、不等比較における表現では、[(一方の) 優先 → (他方の) 排除 → 基準項での否定の内在 → 基準項での否定の顕在化 (虚辞の no の出現)] という推論

の筋道が考えられる³⁵⁾。Gutiérrez (1994b: §11.3.)は、この筋道を採用して説得力のある説明をしている。彼は、本稿の4.2.2.で扱っている訂正表現 (Gutiérrez では制限用法) に基づいて、39aは「彼は少尉というよりも大尉だ」という不等比較なのか、「彼は少尉ではなくて大尉だ」という訂正表現なのかの判別が難しいが、

39a. Más es un capitán que un alférez.

39b. Más es un capitán que no un alférez.

訂正表現であることを明示するために39bのように虚辞のnoを加えるのだ、と説明している。この場合も、本稿の説明に従えば、基準項における否定の内在はY+比較とY-比較のタイプの不等比較表現に認められる可能性があるが、虚辞のnoはY-比較のときに出現する可能性が大きい、ということになる。

7. 程度副詞の表現

日本語では、たとえば完全比較の不等比較表現で「XはYより～Aだ」でのように、Aの直前の位置に程度副詞が置かれることがある。日本語の程度副詞には、「もっと、ずっと、はるかに、断然、更に、一段と、なお、もう少し、ひときわ、よけい、最も、いちばん、多少、かなり、少し、ちょっと、やや、いささか」などがある (cf. 佐野 1998: 112)。

不等比較で使われる程度副詞の意味には、つぎの3種類が考えられる (1.3.3.)。ひとつはXとYの共通属性の程度がその尺度上でどのような差があるのかが「もっと」や「ずっと」などで、そしてY+の度合いが大きいと認識されているときにXの度合いがさらにそれよりも大きいことが「いっそう」などで表現される。さらに、具体的な差がどれほどなのかが具体的な数量詞 (文中では副詞) の「10センチ」や「3倍」などで表現される (cf. 注5)。

川端 (2002: 36) によれば、日本語の程度副詞は、XとYの共通属性の程度がその尺度上で差があることを表現する「もっと、もう少し、もうちょっと」(「もっと」類)、XとYの属性の度合いの差が大きいことを表わす「ずっと、はるかに、断然、よほど」(「ずっと」類)、Y+の度合いが大きいと認識されているときにXの度合いがさらにそれよりも大きいことを表現する「いっそう、さらに、ますます、一段と、ひとしお、なおさら、いよいよ」(「いっそう」類)に分けられる (cf. 1.3.3.)³⁶⁾。

以下では、日本語の表わす程度副詞とそれに対応するスペイン語の表現を提示する。

7.1. 「もっと」類の対比

「もっと」は、佐野 (1998: 104) によれば、XとYの幅の大きさを問題としないで、「XとY

の『関係』(XもYもAであるが、どちらの程度が上か)を述べるだけであり、その関係は話者の客観的な判断によってきまる。XとYの属性の程度差が大きいという意味は含まれていない。さらに、「もっと」は、比較項(X)だけでなく、基準項(Y)もAである、という前提を必要とする(佐野 1998: 110)。すなわち、「もっと」は不等比較のなかのY+比較を表現し、基本的にはその程度差の存在を表現する程度副詞であることになる。

本稿の説明方法では以下のようになる。「XはYよりAだ」では、「より」が基準項導入辞と「正の比較表示」という、ふたつの意味機能を果たしていた。しかし「XはYよりもっとAだ」では、「より」が基準項導入辞としてのみ働き、「正の比較表示」の機能は「もっと」が果たしていることになる³⁷⁾。

となれば、「XはYよりもっとAだ」は“X es más A que Y”に対応していて、「より」がqueの、そして「もっと」はmásの働きをすることになる。なお、「もっと」類に含められる「もう少し」(「XはYよりもっと少しAだ」)などは、差異項(TD, cf.注5)として数量詞un pocoを加える必要があり、“X es un poco más A que Y”となるが、そうすると「より」が基準項導入辞と「正の比較表示」のふたつの意味機能を担うことになる。

7.2. 「ずっと」類の対比

「ずっと」には、西尾ほかの国語辞典では「彼のほうがずっとえらい」のように「はなはだし開きがあるさま」という語義が与えられている³⁸⁾。佐野(1998: 104)も「ずっと」類は、普通、「XとYの幅が大きく開いている場合に用いる」と述べている。しかし「ずっと」は、「もっと」と違って、単純な不完全比較(3.2)の構文では使いにくい。たとえば、佐野の例文(1998: 102)では、「この部屋は高いですね」に対して、「でも、ほかの部屋はもっと高いですよ」は言えても、「でも、ほかの部屋はずっと高いですよ」は言いにくい。しかし「Yさんは若いけれど、XさんはYさんよりずっと若い」という完全比較の構文(3.1.1)や「ほう」を加える「Yさんは若いけれど、Xさんのほうがずっと若い」や西尾ほかの例文「彼のほうがずっとえらい」でなら、問題なく言うことができる。

本稿の説明方法に従えば、「XさんはYさんよりずっと若い」では、基準項導入辞の「より」が「正の比較表示」としても機能している。「ずっと」は、「正の比較表示」をする「もっと」と違って、単にXとYの属性の度合の幅が大きいという意味を加えているだけで「正の比較表示」という機能がない。それゆえ「ほかの部屋はずっと高いですよ」では比較の意味が表現されていないことになるので言いにくい。しかし、「ほう」によって比較の存在を示せば言いやすい、ということになる。

奥村(1995: 94-95)は、例えば本稿の1.2.で示した図1などの、比較構文で比べられるXとYの属性の程度を表わす尺度上で、「興味深いことに『ずっと』はこの[尺度上の]0値とYの位置関係については制限がない」と指摘している。すなわち、完全比較の構文(3.1.1.)に「ずっ

と」が加わっても、その比較構文は Y+ 比較にも Y0 比較にも Y-比較にもなりうる、ということである。

「ずっと」類の程度副詞は、X と Y の属性の度合の差が大きいことを表わす (2.5.2.2.)。「ずっと」に対応するスペイン語は、差異項 (TD, cf. 注 5) として働く副詞の数量詞 mucho などである。「X は Y よりずっと A だ」は “X es mucho más A que Y” となる。

7.3. 「いっそう」類の対比

北原の国語辞典『明鏡』では、副詞の「いっそう」には「それより以上に程度が高まるさま」という語義が与えられている。「いっそう」は「それより以上に」というときの基準項「それ」の属性の度合が正でないと使えない。たとえば、「X は Y よりいっそう背が高い」というとき、Y の属性（背の高さ）が正（背が高い）である必要があり、Y の属性が負（背が低い）のときには使えない、ということである。このことは「いっそう」が Y-比較では使えないことを意味する。また、「いっそう」類の程度副詞は、Y0 比較の不等比較表現では、例文 35・36 のように、ある程度の数量とかそれ相当の概念が基準項である場合なら、それが度合計測上の起点であっても使うことができる。起点となる概念が数量的概念ではないときには、「いっそう」は使えない。川端 (2002: 39) はこのことを例文 40 で示している。

40. 駒ヶ岳は右（南）に見えます。槍は [*いっそう / *ますます / *一段と / *なおさら / *いよいよ / さらに] 右（南）です。

このグループの程度副詞のなかで、例文 40 からわかるように、「さらに」だけが他と異なって Y0 比較の表現でも使える。

「いっそう」類の程度副詞は、Y+ の度合いが大きいと認識されているときに X の度合いがさらにそれよりも大きいことを表現する。Y+ の度合いが大きいと認識されるのは Y+ 比較のときや、計測起点が Y (0) の Y0 比較のときで、ある程度の数量的概念が基準項であるときに使用できる。Butt *et al.* (2019: 446) は「いっそう」の意味の英語 even に対応するスペイン語を例文 41 で提示している。そこに含まれているスペイン語の副詞が日本語の「いっそう」類の副詞に対応する。

41. Es todavía/aún/aun/incluso/hasta más difícil de lo que yo pensaba. 「それは私が考えていた（程度）よりいっそう難しい」

8. おわりに

不等比較表現は、日本語ではそれほど込み入ってはいないが、スペイン語では統語的にも意味的にも複雑な様相を呈している。本稿ではこの両言語の不等比較表現の対応を考察するため、まず、不等比較の表現に関する基礎的な情報を明らかにし、日本語での表現を分類した。そしてそれらに対応する可能性のあるスペイン語表現を提示しながら、下の表のような項目の表現での日西両語の対比を行なった。また、日本語に多い不等比較の程度副詞とそれに対応するスペイン語を明らかにした。

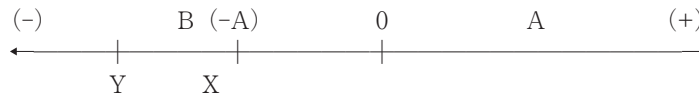
本稿では不等比較の認知構造を仮定して、不等比較の各種の表現の仕組を説明したが、さらに、不等比較表現の否定の問題を紹介し、スペイン語で起こる虚辞の *no* の出現の理由がこの認知構造によって説明できる可能性を示すことができた。

本稿が日本におけるスペイン語教育に何らかの参考になれば幸いである。さらに、若手研究者にとって批判的な論考のヒントがひとつでも含まれているとすれば、筆者にとって望外の喜びとなろう。

真性不等比較表現	
完全比較	日：松茸は椎茸より（もっと）高い。 西：El árbol es más alto que la casa.
不完全比較	日：（椎茸は高いが）松茸はもっと高い。 西：Me gustan más los elefantes.
一方指定比較	日：（ふたりのうち）背の高い方が先生だ。 西：Paco es el más alto (de los dos).
疑似不等比較表現	
追加表現	日：人に聞くより自分で調べるべきだ。 西：Bebe más líquidos que agua.
訂正表現	日：この寝具はふとんというより毛布だ。 西：Es más el director que el gerente.
優先表現	日：途中退場するなら入場しない方がmalıdır。 西：Es más bien inteligente que astuto.
相対的關係表現	日：神戸は大阪より西に位置する。 西：Kobe está situada más al oeste de Osaka.

注

- 1) スペイン語の比較表現には不等比較と同等比較があり、不等比較には *superioridad* と *inferioridad* がある。この両者は伝統的に優等比較・劣等比較と訳されて論じられてきた。ラテン語の *superior*, *inferior* はもともと形容詞比較級語であり、基本となる意味は「上部に位置する」・「下部に位置する」であって、それらの「優れた」・「劣った」という意味は基本的意味から派生した意味である (cf. 逸身 1996: 110)。スペイン語の不等比較にはそもそも優劣の意味はないから、たとえば「上位比較」・「下位比較」と訳すほうが、不要な誤解を避けることができよう。なお、いわゆる最上級の表現は不等比較の一種である。
- 2) 第4の認知タイプとして、以下の図のように、YもXも社会通念上でAの対義概念のB (-A) であると認められる時が考えられる。XもYも背が低いのに「XはYより背が高い」という不等比較が表現されるようなときである。このタイプは、属性の尺度上では第1のタイプのY+に準じるものとして扱う。



- 3) 度合的对義語 (gradable opposites) と非度合的对義語 (ungradable opposites) の区別は、河西 (2010: 450-451) が主張する内部対立と外部対立に対応する。河西は、(単一) カテゴリー内部の成員は均質的なものではなく、様々な視点から、特に、価値評価の尺度から差異化がなされ、非均質的なものになっていると考えられるが、その内部の否定を含蓄する否定を「カテゴリー内否定」と呼び、両立不可の概念 (2種類のカテゴリー) の場合、一方のカテゴリーを否定したとき、その外部 (もう一方のカテゴリー) を論理的に含蓄する否定を「カテゴリー外否定」と呼んでいる。度合的对義語がカテゴリー内否定につながり、非度合的对義語がカテゴリー外否定につながっている。
また NGL (2009: §13.2w) は、度合的对義語と非度合的对義語の区別はそれぞれ度合的对立と欠如的对立の区別であるとするが、言語使用の実態では多くの欠如的对立の形容詞は、*Estaba medio muerto*。「彼は半ば死んでいた」のように度合的对立に適合すると述べている。
- 4) この現象について、井出祥子 (2006: 92) は次のように述べている。「人間の脳は、『良い、悪い』、『大きい、小さい』というように、実際には中くらいもあるのに白と黒の二つに分けて考えがちである。この傾向は、あたかも絶対的真理のように頭の奥に敷かれているし、人々はそのように教育されてきている」。
- 5) 数量化の表現は基準項 (Y) と比較項 (X) との差異を表現するが、その差異は比較項の比較属性の程度を修飾しているのではなく、両項の属性の度合の違いに相当する。筆者はすでに Miyoshi (1992) において、そのような不等比較の程度差を表現する要素を「差異項」(TD: *Término de diferencia*) と呼んでその使い方を論じておいた。NGL (2009: 45.2k) は、そのような項が表現するものを「差異の大きさ」(magnitud diferencial) と呼び、つぎのように説明している。「融合型の形容詞比較級表現は、(数量化を伴わない) 形容詞の原級で表現されている比較級と、*muy* の代わりに *mucho* を認める点で異なっている。*mucho más alto* の *mucho* は、(比較項と基準項の) 両者の計測の間で得られる相違を明らかにしている『差異の大きさ』を表現している。他方、*mucho alto* ではなくて *muy alto* と言われるのは、*muy* が単なる原級の形容詞 *alto* の数量詞だからである」。
- 6) 国語学会 (編) (1975: 761) は『「より何々」の形は、翻訳語としてはじめて生じたもので、欧文直訳の典型的な例である。『これよりよい』『それより大きい』などの『これ』『それ』を省略した形と見られるが、もはや『より』を副詞として認めるのが適当であろう』としている。
- 7) 本稿では、「より」は基準項導入辞であるとともに「正の比較表示」という機能を持っている、と仮定する。そうするとスペイン語の劣等比較の比較属性標識である *menos* は「負の比較表示」という機能を持っていることになる。
- 8) たとえばスペイン王立アカデミアのスペイン語辞典 (DLE: 2017) では *más* に 14 種類の語義が与えら

れているし、三好（1990）は *más* の用法を、比較の意味を手掛かりにして 12 種類の統語型に分けて論じる。

- 9) 本稿の用例番号は本稿独自のものであり、原典での番号ではない。
- 10) スペイン語研究の古典である *Bello y Cuervo* (1970: 328) はこれを「比較の接続詞」と呼ぶ。
- 11) なお、見方によると、「2者比較では、格助詞『より』と相対名詞『方（ほう）』という非連続な2語で2つの文を結び付けた表現であると考えられる」（友清・鈴木 1991: 151）。
- 12) 完全比較は Y+ 比較・Y0 比較・Y-比較のどれかになる可能性があるが、友清・鈴木 (1991: 154) はこのことについて以下のような指摘をしている。それは述部をなす語彙（Aに相当）に極性がある場合にはその語本来の意味が成立しなくなる現象である。たとえば「花子は太郎より若い」の場合、「でもふたりとも 60 才をくだるまい」と続けることができるから、花子は必ずしも若くなくてもよい（単なる Y+ 比較）。他方、述語の語彙に極性がなければ、たとえば「この切手よりあの切手がほしい」の場合、「この切手ならいらぬよ」と続けることができるが、「あの切手がほしい」ことにはかわりがない（Y-比較）。これは属性形容詞「若い」と感情形容詞「ほしい」の違いであるが、属性形容詞でも「花子は太郎より若々しい」なら、「太郎より」がなくても、花子が「若々しい」ことが予想できる。これは「若々しい」に段階性/主観性/多様性があるからであると思われる。

なお、明らかに Y-比較である完全比較の用例もある。2020 年 8 月 9 日の朝日新聞には「静かな帰省」と題する記事の写真について「新大阪駅から九州方面へ向かう新幹線のホームは例年より閑散としていた」というキャプションである。閑散（A）という属性の尺度では、今年は閑散（+）だが例年は賑わって（閑散の対義概念、B）いる、という表現である。
- 13) 本稿では便宜上、日本語の「は」も「が」も主語を表わす、としておく。主語に関する日本語とスペイン語の対照については三好（2016: § テーマ 1）を参照されたい。
- 14) 三好（1990）の例文 11。
- 15) Y0 比較であることがよくわかる用例もある。薬丸（2020: 540）の使い方である。「[……] 誘拐事件の裁判に影響が出てしまうかもしれないと…その事件で殺された被害児童のお母さんとは、捜査を担当した警察官という以上の親密な関係でしたから、より強くそう思ったのかも知れません」である。基準項（Y）は「出てしまうかもしれない（思った）」であり、その度合いを起点にして、比較項（X）「強くそう思った」のである。
- 16) 三好（1990）の例文 91。
- 17) この用例が、実は、筆者がスペイン語の不等比較表現の研究を始めたきっかけであった。
- 18) 渡辺義夫（1965: 32）は「引き合いに出した一方を捨てて、他方だけをとり上げる場合の結びつきのカテゴリー」を「えらび」と呼んでいる。
- 19) この例文は、上田ほか（2004）のものを参考にして作例した。
- 20) この場合、*más* は形容詞 *mucho* 「多くの」の比較級語である。「正の比較表示」の機能のほかに「多くの」の意味も含まれている。
- 21) 起点が時間的な位置の場合、スペイン語では *más* ではなくて比較級語の *antes* 「より前に」と *después* 「より後に」が使われる。本稿は *más* に限定して論述しているので、例文 15 「佐藤さんは私が到着するより前に帰ってしまった」 *El señor Sato regresó antes (de) que yo llegara.* のように時間的な位置が起点になる表現は検討から除外する。
- 22) この語連結は *alto* の原級の表現 *Pedro es 190 centímetros de alto.* 「ペドロは背が 190 センチある」 (*Pedro mide 190 centímetros.* と同義) を考慮すれば納得できる。
- 23) Plann (1984: 210) には *José tiene amigos más interesantes que (*de) los que conocen Juan y Pepe.* 「ホセにはホアンやベベが知っている友人たちよりも面白い友人たちがいる」という例文が挙げられている。
- 24) 高垣（監）の用例。
- 25) 上田（2011: 351）の用例。
- 26) 『明鏡』の④の例文も。
- 27) 記述文法 3（2012: 289）は「比較を表す『～より～』という表現も否定文では用いられにくく、『～ほ

- ど〜』という形をとる」としているが、その理由は説明されていない。
- 28) 森山は「よくない」などは語彙的例外であると指摘しているが、おなじように「飛行機のほうが新幹線で行くよりお金がかからない」が言えたとすれば、飛行機と新幹線の「お金がかからない」という属性の度合が、「飛行機」の方が大きいということで、「より」は「正の比較表示」の機能を果たしていることになる。
- 29) 「言わないより言ったほうがよい」では、「言わない」という顕在否定の表現が基準項になっている。
- 30) スペイン語には「負の比較表示」の機能を持つ劣等比較級語 *menos* があるので、「彼は兄ほど賢く(は)ない」は *Es menos listo que su hermano.* という表現にも対応する。
- 31) *No es más ~* と *No llovió ~* の文は Gutiérrez 1994b: 65 のもの。Juan no compró ~ は Butt *et al.* 2019: 78 のもの。no más que のふたつの意味の存在は Bolinger (1953: 32) も論じている。また、基準項導入辞が *de* になる相対的關係の不等比較表現の no más de は、「~以上ではない」を意味しており、Juan no compró más de veinte libros. には「ホアンは(多くても)20冊の本を買った」という日本語が対応する (cf. Butt *et al.* 2019: 78)。“no más que/de” の表現については三好 (1995) も参照された。
- 32) Rivero (1970: 655); Gutiérrez 1994b: 65; Sánchez 1996 y 1999; Butt *et al.* (2019: §27.2.4) など。日本でも高橋 (1967: 280), 長谷川 (1992: 用法②), 田林 (2012: § 第三章の3節) などがこの問題を扱っている。
- 33) Bello *et al.* (1970: §1140) や DPDD (2005: 456) は、このような“que (no) que” (基準項導入辞の que+接続詞の que) が連続する聴覚効果の悪さ (cacofonia) を避けるために虚辞の no が必要だとしている。
- 34) Sánchez (1999: 2622) もこの混同を虚辞の no の出現理由として挙げている。
- 35) Cf. Bolinger (1991: §2); García de Diego (1970: 377), etc.
- 36) 副詞の「より」は、本稿2章で紹介したように (cf. 『明鏡』の⑤), 程度副詞の「もっと」と同義である。また西尾ほかの国語辞典でも「もっと」という語義が与えられている。しかし程度副詞としては扱われていない。
- 37) 渡辺実 (1986) はさらに論を進めているが、佐野 (1998: 注4) は「XはYよりもっとAだ」と「Xは(Yでなく)もっとAだ」の「間に連続性は認められない」として後者(とその発展構文)を「否定的用法」と呼んでいる。
- 38) 「ずっと」には「ずっと立ち通しだ」でのように「初めから、または長い間続けて」という意味もある。

参考文献

- 安達太郎 (2001). 「比較構文の全体像」。『広島女子大学国際文化学部紀要』, 第9号, 1-19。
- 逸身喜一郎 (1996). 「より速く, より高く, より強く」。『月刊 言語』1996年9月号, 108-113. 大修館。
- 井出祥子 (2006). 『わかまへの語用論』, 大修館。
- 上田博人ほか (編) (2004). 『クラウン和西辞典』, 三省堂。
- 奥村大志 (1995). 「『もっと』についての考察」。日本語教育学会『日本語教育』, 87号, 91-102。
- 河西良治 (2010). 「否定: 対立と超越」。加藤泰彦ほか (編) 『否定と言語理論』, 開拓社, 443-461。
- 川端元子 (2002). 「比較構文に出現する程度副詞: スケールの相違という観点から」。国立国語研究所『日本語科学』, 12巻, 29-47。
- 記述文法2: 日本語記述文法研究会 (編) (2011). 『現代日本語文法2』, くろしお出版。
- 記述文法3: 日本語記述文法研究会 (編) (2012). 『現代日本語文法3』, くろしお出版。
- 北原保雄 (編) (2002). 『明鏡 国語辞典』, 大修館。
- 国語学会 (編) (1975). 『国語学辞典』, 東京堂出版。
- 佐野由紀子 (1998). 「比較にかかわる程度副詞について」。『国語学』, 195集, 99-112。
- 澤田治 (2012). 「比較構文の語用論」。澤田治美 (編) 『構文と意味』, ひつじ書房, 133-155。
- 高橋正武 (1967). 『新スペイン広文典』, 白水社。

- 谷口一美 (2003). 『認知意味論の新展開——メタファーとメトニミー』, 研究社。
- 田林洋一 (2012). 『スペイン語の否定語の概念構造に関する研究』, ひつじ書房。
- 友清睦子・鈴木雅実(1991). 「日本語会話文における比較表現の分析」. 『自然言語処理』, 84-20, 151-158。
- 西尾実ほか (編) (2007). 『岩波国語辞典』, 第6版, 岩波書店。
- 長谷川信弥 (1992). 「虚辞の no について」. *Estudios Hispánicos*, 大阪外国語大学, Vol. 17, 57-68。
- 三好準之助 (1990). 「現代スペイン語の不等比較表現の研究」. 『京都産業大学論集』外国語と外国文学系列, 第17号, 198-279。
- 三好準之助 (1995). 「数値評価とスケール否定叙述」. 『京都産業大学論集』外国語と外国文学系列, 第22号, 19-31。
- 三好準之助 (2016). 『日本語と比べるスペイン語文法』, 白水社。
- 森山卓郎 (2004). 「日本語における比較の形式」. 『月刊言語』, 大修館, 2004年10月号, 32-39。
- 八木孝夫 (1987). 『程度表現と比較構造』(新英文法選書, 第7巻), 大修館。
- 安井稔ほか (編) (1976). 『現代の英文法 第7巻 形容詞』, 研究社。
- 山本秀樹 (2004). 「比較表現あれこれ」, 『月刊言語』, 大修館, 2004年10月号, 24-30。
- 渡辺実 (1986). 「比較の副詞——『もっと』を中心に——」. 『学習院大学言語共同研究所紀要』, 8号, 65-74。
- 渡辺義夫 (1965) 「日本語の『比較』——『より』の用法——」. 東京教育大学言語学研究会『言語学論叢』, 第6巻, 22-36。
- Alcina Franch, J. & J. M. Blecaua (1979). *Gramática Española*. Barcelona: Editorial Ariel.
- Bello, A. & R. J. Cuervo (1970 [1847]). *Gramática de la Lengua Castellana*. Buenos Aires: Sopena Argentina.
- Bolinger, D. L. (1953). "The Comparison of Inequality in Spanish". *Language* (Journal of the Linguistic Society of America), Vol. 29, 28-62.
- Bosque, I. (1980). *Sobre la negación*. Madrid: Ediciones Cátedra.
- Butt, J. et al. (2019). *A New Reference Grammar of Modern Spanish*, Sixth Edition. London and New York: Routledge.
- DLE: Real Academia Española (2017). *Diccionario de la Lengua Española*, 23.^a edición, versión electrónica 23.1. Madrid.
- DPDD: Real Academia Española y Asociación de Academias de la Lengua Española. (2005). *Diccionario panhispánico de dudas*. Madrid: Santillana Ediciones Generales.
- Fernández Ramírez, S. (1986). *Gramática española* (2.^a ed.). 3.1. *El nombre* (volumen preparado por José Polo). Madrid: Arco Libros.
- García de Diego, V. (1970 [1920]). *Gramática histórica española*. Madrid: Editorial Gredos.
- Gutiérrez Ordoñez, S. (1994a). *Estructuras comparativas*. Madrid: Arco Libros.
- Gutiérrez Ordoñez, S. (1994b). *Estructuras pseudocomparativas*. Madrid: Arco Libros.
- Hanssen, F. (1966 [1913]). *Gramática histórica de la lengua castellana*. Paris: Les Presses du Marais.
- Llorens, E. L. (1929). *La negación en español antiguo con referencias a otros idiomas*. Madrid: José Molina.
- Lyons, J. (1977). *Semantics*. Vol. 1. Cambridge University Press.
- Miyoshi, J. (1990). "Construcción: más que / de el (~, lo) que". *Lingüística Hispánica*, Vol. 13, 35-43.
- Miyoshi, J. (1992). "El TD de la construcción comparativa". *Lingüística Hispánica*, Vol. 15, 39 y sigs.
- Miyoshi, J. (1998 [1990]). "Estimación numérica con MÁS/MENOS". *Atas do IX Congresso Internacional da Associação de Lingüística e Filologia da América Latina*, Vol. III. Campinas: Instituto de Estudos da Linguagem da UNICAMP, 161-168.
- NGLE: Real Academia Española y Asociación de Academias de la Lengua Española. (2009). *Nueva gramática de la lengua española*. Madrid: Espasa Libros.
- Plann, S. (1984). "The syntax and semantics of *más/menos...que versus más/menos...de* in comparatives of inequality". *Hispanic Linguistics*, 1:2, 191-213.

- Rivero, M-L. (1970). "A surface structure constraint on negation in Spanish". *Language*, 46, 650-666.
- Ross, J. R. (1969). "A proposed rule of Three-Pruning". Reibel, D. A. & S. A. Schane (eds.), *Modern Studies in English Readings in Transformational Grammar*. Englewood Cliffs, New Jersey: Prentice-Hall, 288-299.
- Sáez del Álamo, L. A. (1999). "Los cuantificadores: Las construcciones comparativas y superlativas". Bosque, I. & V. Demonte (dirs.), *Gramática descriptiva de la lengua española*. Madrid: Espasa Calpe, Cap. 17, 1128-1188.
- Sánchez López, C. (1996). "Observaciones sobre la negación expletiva en español". *Español Actual* (revista de español vivo). Madrid: Arco Libros, Vol. 66, 25-41.
- Sánchez López, C. (1999). "La negación". Bosque, I. & V. Demonte (dirs.), *Gramática descriptiva de la lengua española*. Madrid: Espasa Calpe, Cap. 40, 2561-2634.
- Stassen, L. (1985). *Comparison and Universal Grammar*. Oxford: Basil Blackwell.
- VoBhagen, C. (1999). "Opposition as a Metonymic Principle". Panther, K-U. et al (ed.), *Metonymy in Language and Thought*. Amsterdam, etc.: J. Benjamins Pub., 289-308.

用例の資料

- 朝日新聞大阪本社, 『朝日新聞』, 2020年8月9日, 14版, 22頁。
- 上田博人 (2011). 『スペイン語文法ハンドブック』, 研究社。
- 高垣敏博 (監) (2007). 『西和中辞典 (第2版)』, 小学館。
- 辻真先 (1987). 『迷犬ルパンと「坊ちゃん」』, 光文社 (「現代日本語書き言葉均衡コーパス 少納言」より)。
- 中野剛志 「『21世紀の資本論』新自由主義への警告」。『文芸春秋』, 2014年10月号, 144-152。
- 林真理子 「8050」, 連載第10回。『週刊新潮』, 2020年4月30日号, 68-72。
- 北海道歴史教育研究会 (編) (1994). 『北海道の歴史散歩』, 山川出版社 (「現代日本語書き言葉均衡コーパス 少納言」より)。
- 矢樹純 「したたかな嘘」。『小説新潮』, 2020年2月号, 170-188。
- 薬丸岳 「刑事弁護士」。『小説新潮』, 2020年2月号, 536-544。
- 柚木裕子 (2019). 『蟻の菜園』, 角川文庫。
- Azancot, Leopoldo. (1988). *Los amores prohibidos*. Barcelona: Tusquets (CREA).
- BBC (1986). *¡Digame!* (A television and radio course for beginners in Spanish). London: BBC Publications.
- CORDE: Real Academia Española. *Corpus Diacrónico del Español*. Consultado el 14 de mayo de 2020.
- CREA: Real Academia Española. *Corpus de Referencia del Español Actual*. Consultado el 14 de mayo de 2020.
- Gironella, José María (1989). *Un millón de muertos*. Barcelona: Editorial Planeta (CREA).
- Grandes, Almudena (1995). *Las edades de Lulú*. Barcelona: Tusquets Editores (CREA).
- Martin Vigil, José Luis (1968). *Los curas comunistas*. Barcelona: Circulo de Lectores (CORDE).
- Zunzunegui, Juan Antonio de (1960). *En torno a D. Pío Baroja y su obra*. Bilbao: Diputación de Vizcaya (CORDE).

A Japanese-Spanish contrastive essay on unequal comparative expressions

Jun-nosuke MIYOSHI

Abstract

There are two types of comparative expressions: one is called 'comparison of equality', when the degree of common property of compared two entities is equal, and 'comparison of inequality', when the same degree is unequal. First, we will attempt to clarify the general concepts of the comparison of inequality, and then to enumerate the diverse forms of modern Japanese for the comparison of inequality. We will then suggest the corresponding forms in modern continental Spanish, that are used for the expression of comparison of inequality. In this manner, we present a certain possible contrast of the forms of unequal comparative expression of both languages. We hope that this paper will provide a new perspective on these phenomena for Japanese learners of Spanish.

Keywords: comparison of inequality, comparative of superiority, Japanese-Spanish contrast, "YORI", "más".

